

エ 「水の必要量を感動を持ってとらえているか」を評価する

○ 下位目標4の評価結果

評価目標	評価の場面	評価法	評価用具の内容または評価基準	評価の意図
下位目標4 製鉄業における水の必要量を感動を持ってとらえているか。	本時の学習のまとめの場面	自己評価法(作文)	きょうの授業の感想を作文にまとめてみましょう。 D 学習対象に対して無関心である C 学習対象に注意が向いている B 学習対象を感動を持ってとらえている A 学習対象への興味が学習の発展のための動機づけとなっている	次時の導入のあり方を決定するため

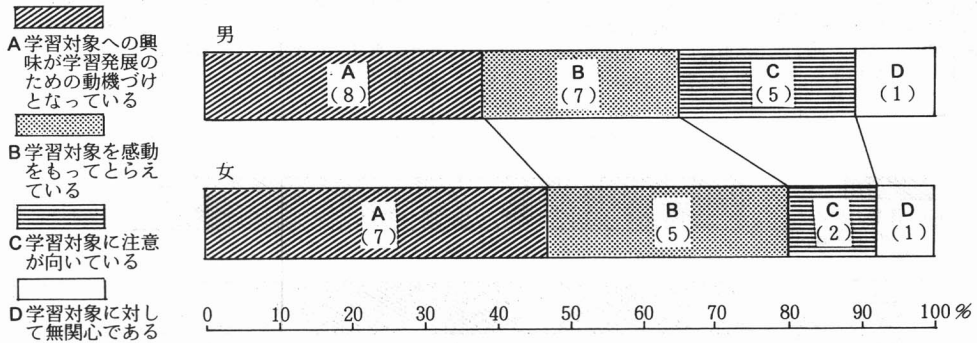


図8 下位目標4の評価結果

○ 考察

「きょうの学習のまとめをノートに書きましょう。」という発問で書かせた文章を、授業終了後、評価基準をもとに観察し、評価した。これは、指導者にとっては、間接的な観察法であるといえるが、子どもたちにとってみれば、その評価場面で立ち止まり、自分の学習をふりかえって記述することになるので、自己評価法である。ただ、「まとめ」が、「わかったこと」の記述だけで終わってしまうような内容である場合には、作文は、「関心・態度」の評価用具として適切でないといえる。

「関心・態度」の評価用具としての作文については後述するが、「関心・態度」の評価のための「まとめ」にするために、指導者は、「まとめ」に書くべき内容について、事前に指導し

ている。つまり、「まとめ」には、「わかったこと」だけでなく、「楽しかったこと」、「おどろいたこと」、「感想」、「もっと調べたいこと」などについて書くことを、この授業以前に指導してきているということである。

作文分析の結果は上のグラフのようになっている。学級のおよそ75%がBの評価段階に達していると判断している。ただ、これもやはり「関心・態度」の一側面であり、指導者の別な角度からの観察による評価を加味しなければ、この評価の信頼性を高めることはできない。特に、男女各1名、「D、学習対象に対して無関心である」と、まとめの文章から判断された子どもなどは、その文章表現力などのかかわりを十分検討しなければならない。

次に示したのは、A、B、C、Dそれぞれの